

## ネヘミヤ記11-12章「エルサレムに起こる喜び」

### 1A エルサレムに住む勇士たち 11

1B 十分の一の人々 1-2

2B かしらたち 3-24

1C ユダ族とベニヤミン族 3-9

2C 祭司たち 10-14

3C レビ人たち 15-24

3B 農地のある周囲の村々 25-36

### 2A 感謝の歌のいけにえ 12

1B ゼルバベルとヨシュアからの系図 1-26

1C 祭司とレビ人 1-21

1D ゼルバベル時代 1-11

2D エホヤキム時代 12-21

2C ネヘミヤの時代の登録 22-26

2B 城壁の奉献式 27-47

1C 歌い手の召集 27-30

2C 賛美隊の行進 31-39

1D 右の方に向かう組 31-37

2D 左の方に向かう組 38-39

3C 神の宮での賛美 40-43

4C 祭司とレビ人の生活の支え 44-47

## 本文

ネヘミヤ記 11 章を開いてください。私たちのネヘミヤ記の学びは、前回で 10 章まで来ました。そこで、ネヘミヤや指導者、祭司やレビ人、そして全ての民が、盟約を結んだところを読みました。その盟約とは、モーセの律法に従って、異邦人と結婚しない。安息日に商売をしない。礼拝のための納入金を怠らない。初子をささげ、初物を捧げる。レビ人や祭司のために十分の一の捧げものをする。そういったことを盟約して、周囲の民の中に住んでいながら、自分たちが神の民であり、「10:39 神の宮をなおざりにはしない」決意を固めました。私たち教会も、神の民であり、共同体として神に献げることが学びました。

### 1A エルサレムに住む勇士たち 11

そして 11 章に入ります。ここでは、エルサレムに住む献身をする人々の名が記されています。

## 1B 十分の一の人々 1-2

<sup>1</sup> 民の指導者たちはエルサレムに住んでいたが、それ以外の民はくじを引いて、十人のうちから一人ずつ、聖なる都エルサレムに来て住むようにし、あとの九人をほかの町々に住ませた。<sup>2</sup> 民は、自分から進んでエルサレムに住もうとする人々をみな祝福した。

城壁が完成された後に、7章4節を見ると、「この町は広々としていて大きかったが、その中の住民は少なく、家もまだ十分に建てられていなかった。」とあります。ですから、指導者としては、ここに人々を住ませたいのですが、けれども、エルサレムに住むことがどれだけ争いの中に巻き込まれるか、知れません。私たちはずっと、城壁建設の時に周囲の民が激しく敵対したのを見ました。また、エルサレムに住むということは、自分たちの住んでいる所から離れることであり、自分たちの生活、その仕事にも犠牲が伴います。ですから、ここに住むということは、大きな犠牲が伴います。そもそも、バビロンからの帰還民が、離散した全体のユダヤ人からするとごく少数であったことから、それが大きな信仰による冒険であり、犠牲が伴うものであったことが分かります。

しかし、それでもエルサレムに住む決意をするということは、その理由が「聖なる都」だということです。主がそこにご自分の御名を置くと約束されたところです。そして、その定められたところで神の宮が建てられ、そこでご自分の栄光を現すとお決めになったところです。神を神とするため、ただこれだけの理由でエルサレムの都が成り立っています。そのことに献身するということは、普通ではできない、常識で考えたらできないことです。私たちも、具体的なところで神さまのことに、教会のことに関わろうとすれば、いろいろな葛藤の中に置かれるかもしれません。また、生活の犠牲もあります。けれども、それは、聖なる神の御名のゆえであり、この方をあがめるための献身であります。

ここで、民がくじを引いて、「十人のうちから一人ずつ」とありますね。これは、先の十分の一の献げ物と同じ考えです。自分たちの中から収穫物のほかに、自分自身を十分の一献げる、ということです。そして、「自分から進んでエルサレムに住もうとする人々」がいました。主は、喜んで献げる人々をいつも愛されます。彼らは祝福されています。

興味深いことに、終わりの日の幻には、全ての人たちが、神の宮に捧げられている姿がゼカリヤ書に描かれています。ゼカリヤ書には、「エルサレムは、その中に人と家畜があふれ、城壁のない町のようになる。(2:4)」との預言があります。そして、生活全体が聖なるものとなる、という預言もあります。「その日、馬の鈴の上には「主への聖なるもの」と刻まれ、主の宮の中の鍋は祭壇の前の鉢のようになる。エルサレムとユダのすべての鍋は、万軍の主への聖なるものとなる。いけにえを献げる者はみなやって来て、その一つを取ってそれで煮るようになる。その日、万軍の主の宮にはもう商人がいなくなる。(14:20-21)」今は、そのようにはなっていませんが、けれども、その前味を知るために、一部を主にお返しするのです。

## 2B かしらたち 3-24

### 1C ユダ族とベニヤミン族 3-9

3 エルサレムに住んだこの州のかしらたちは次のとおりである。ユダの町々には、イスラエルの人々、祭司、レビ人、宮のしもべたち、ソロモンのしもべたちの子孫が、それぞれ自分たちの町の自分の所有地に住んだ。

エルサレムに住んでいた人々の名が 4 節からありますが、住んでいない人々でも、主の宮で奉仕をする人々は、「ユダの町々」すなわち、エルサレムから近いところに住んでいました。エルサレムは、その北がベニヤミンの割り当て地であり、南がユダの割り当て地です。ユダ族とベニヤミン族の割り当て地の境にエルサレムがあります。

4 エルサレムには、ユダ族とベニヤミン族のうちのある者が住んだ。ユダ族では、まずウ ज्याの子アタヤ。ウ ज्याはゼカリヤの子、ゼカリヤはアマルヤの子、アマルヤはシェファテヤの子、シェファテヤはマハラルエルの子、マハラルエルはペレツの子孫の一人である。5 次にバルクの子マアセヤ。バルクはコル・ホゼの子、コル・ホゼはハザヤの子、ハザヤはアダヤの子、アダヤはエホヤリブの子、エホヤリブはゼカリヤの子、ゼカリヤはシロ人の子孫である。6 エルサレムに住んだペレツの子孫は合計四百六十八人の勇士であった。

ユダ族の人々のかしらの名が書かれています。「アタヤ」という人と、「マアセヤ」という人です。そしてそこに書かれているのは、アタヤとマアセヤのそれぞれの系図です。どちらもペレツという、ユダの息子から出てきた子孫であります。そして、合計が 468 人です。彼らがくじ、あるいは、自ら進んで住んだ人々です。彼らは「勇士」とあります。彼らは、何か敵が攻めてきたら真っ先に武器をもって戦うことができるようにしていました。主に献身する人たちは、初めから戦うということを想定して、献身しますね。

7 ベニヤミン族では次のとおりである。まずメシュラムの子サル。メシュラムはヨエデの子、ヨエデはペダヤの子、ペダヤはコラヤの子、コラヤはマアセヤの子、マアセヤはイティエルの子、イティエルはエシャヤの子である。8 彼の次にガバイとサライで、九百二十八人。

ベニヤミン族のかしらで、サルという人でした。そして人数が 928 人です。

9 ジクリの子ヨエルが彼らの監督者であり、セヌアの子ユダがこの町の副監督者であった。

エルサレムに住むユダ族とベニヤミン族の監督者と副監督者の名前です。

## 2C 祭司たち 10-14

次は、エルサレムに住む祭司たちの名です。

<sup>10</sup> 祭司のうちでは、エホヤリブの子エダヤと、ヤキン、<sup>11</sup> ヒルキヤの子セラヤであった。ヒルキヤはメシュラムの子、メシュラムはツアドクの子、ツアドクはメラヨテの子、メラヨテはアヒトブの子である。セラヤは神の宮のつかさであった。<sup>12a</sup> 彼らの同族で宮の務めをする者は八百二十二人。<sup>12b</sup> また、エロハムの子アダヤ。エロハムはペラルヤの子、ペラルヤはアムツィの子、アムツィはゼカリヤの子、ゼカリヤはパシュフルの子、パシュフルはマルキヤの子である。<sup>13</sup> アダヤの同族で一族のかしらたちは二百四十二人。また、アザルエルの子アマシュサイ。アザルエルはアフザイの子、アフザイはメシレモテの子、メシレモテはイメルの子である。<sup>14</sup> 彼らの同族の勇士たちは百二十八人。彼らの監督者はハゲドリムの子ザブディエルであった。

先ほどのユダ族とベニヤミン族と同じように、祭司でも、各氏族のかしらの名が記されて、その人の系図があります。そして人数が書かれています。12 節には、「宮の務め」をする人があり、14 節には、「勇士たち」とあり、驚くことに祭司たちも武器をもっていたのです。それだけ、一人一人が敵に相対しなければいけない危険と隣り合わせだったのです。最後に、監督者の名が記されています。祭司といっても、二十四組に分かれて自分の時が来た時に神殿奉仕をするので、必ずしもエルサレムに住まなくても良かったのですが、この人たちは住みました。

## 3C レビ人たち 15-24

<sup>15</sup> レビ人のうちでは、ハシュブの子シエマヤ。ハシュブはアズリカムの子、アズリカムはハシャブヤの子、ハシャブヤはブンニの子である。<sup>16</sup> また、レビ人のかしらのうちシャベタイとエホザバデは、神の宮の外まわりの仕事をつかさどっていた。

祭司の次はレビ人です。レビ人は、祭司が聖所の中で奉仕をするのに対して、その奉仕に関わる補助的な働きをします。シエマヤは、「神の宮の外まわりの仕事」をつかさどっていました。

<sup>17</sup> また、ミカの子マタンヤ。ミカはアサフの子のザブディの子である。マタンヤは祈りの時に感謝の歌を歌い始める指導者、バクブクヤはその同族の副指導者であった。また、シャムアの子アブダ。シャムアはエドトンの子のガラルの子である。<sup>18</sup> 聖なる都にいるレビ人は合計二百八十四人であった。

レビ人が行う大きな奉仕で、ダビデの時代から始まったのが、歌うたいです。ここで、祈りの時に感謝の歌があり、その歌を歌う指導者が、マタンヤであるとあります。詩篇には、数多くの感謝の歌が残されています。教会において、賛美の奉仕というものが、単に音楽を奏でればできるというものではないことを知る必要があります。ダビデは、礼拝の補佐をするレビ人に任せたと、主

への礼拝の核になる部分であります。なにより、天において行われていることは、賛美や楽器による歌による、神に対する礼拝ですから。

そして他に、アブダという人がいて、レビ人で聖なる都にいる人々は 284 人です。

<sup>19</sup> 門衛では、アクブとタルモン、および門の見張りをする彼らの同族で、百七十二人であった。

門衛は、聖なる神殿を汚さないように守る働きがあります。きよめられた者しか入ることはできません。また、神殿には金銀などの財宝もあり、盗人が来るかもしれません。霊の戦いの最前線に置かれている人々です。

<sup>20</sup> そのほかのイスラエルの人々、祭司、レビ人たちは、ユダのすべての町で、それぞれ自分の相続地にいた。

他の人々は、先に話しましたように、自分たちの相続地に住みます。ただ祭司やレビ人は、町があてがわれているだけで、相続地はありません。主のご臨在が相続地であるとの約束があります。

<sup>21</sup> 宮のしもべたちはオフエルに住み、ツィハとギシュパは宮のしもべたちをつかさどっていた。

オフエルは、ダビデの町と神殿の丘にある部分です。今、そこに行きますと、当時の遺跡を残している南壁考古学公園の中にあります。そこから、ソロモン時代の遺跡までが遺っています。神殿のある敷地とダビデの町の間であり、宮に仕える人々がそこに住んでいました。

<sup>22</sup> エルサレムにいるレビ人の監督者は、バニの子ウジであった。バニはハシャブヤの子、ハシャブヤはマタンヤの子、マタンヤはミカの子である。ウジはアサフの子孫の歌い手の一人で、神の宮の礼拝を指導していた。<sup>23</sup> 歌い手たちには王の命令が下っていて、日課が定められていた。<sup>24</sup> また、ユダの子ゼラフの子孫の一人で、メシェザブエルの子ペタフヤは、民に関するすべての事柄について王を助ける役を務めた。

興味深いことが書かれています。レビ人が歌い手であることは先ほど見ましたが、その監督者ウジは、「王の命令」が下っているというのです。ペルシアの王、おそらくクセルクセス王ですが、命令があって、歌を日課としていました。ペルシアの王は、自分のためにも祈るように命じている箇所があるので、彼らは多神教ですから、自分たちの支配している民の神に祈願してもらうことを要求したのです。けれども、これは結果的に良いことですね、私たちも世において、立てられている指導者たちに祈ることは聖書で命じられています。

そして、ユダ族で、ペレツの双子の兄弟ゼラフの子孫の一人が、やはりペルシア王であります、彼を助ける事務を行っています。彼らの都エルサレムが、ユダヤ人の独立国家ではなく、ペルシア帝国の州のひとつであることを良く表しています。

### 3B 農地のある周囲の村々 25-36

<sup>25</sup> 農地がある村々で、ユダの子孫の一部が住んだのは、キルヤテ・アルバとそれに属する村々、ディボンとそれに属する村々、エカブツェエルとその村々、<sup>26</sup> ヨシュア、モラダ、ベテ・ペレテ、<sup>27</sup> ハツアル・シュアル、ベエル・シェバとそれに属する村々、<sup>28</sup> ツイクラグ、メコナとそれに属する村々、<sup>29</sup> エン・リンモン、ツォルア、ヤルムテ、<sup>30</sup> ザノアハ、アドラムとそれらに属する村々、ラキシユとその農地、アゼカとそれに属する村々であった。こうして彼らは、ベエル・シェバからヒノムの谷までの一帯に住みついた。

エルサレムではないところで住んでいるユダ族の人々が、農地をもって住んでいる村々の列挙です。そこでの収穫の十分の一を、神殿に献げることになります。ベエル・シェバというのは、ネゲブ沙漠が始まるところで、ネゲブの北にあります。そこから、ヒノムの谷はエルサレムの南を走る谷ですが、そこまでの村々です。初めのキルヤテ・アルバは、ヘブロンの前に使われていた名前、今も入植地のユダヤ人によって使われています。

<sup>31</sup> ベニヤミンの子孫は、ゲバから、ミクマス、アヤ、ベテルとそれに属する村々、<sup>32</sup> アナトテ、ノブ、アナネヤ、<sup>33</sup> ハツォル、ラマ、ギタイム、<sup>34</sup> ハディデ、ツェボイム、ネバラテ、<sup>35</sup> ロデとオノ、および職人の谷に住んだ。<sup>36</sup> レビ人のうち、ユダにいたある組はベニヤミンに加わった。

ベニヤミンの村々です。エルサレムの北に隣する村々です。レビ人で、こちらのほうに移って住んだ一組がいたようですね。

こうやって、神の宮を守るだけでなく、神の都エルサレムを守り、また献げる体制を見てきました。私たちには、組織や体制を作る必要はないかもしれませんが、けれども、主への礼拝が守られるために、それぞれの献身による、ある程度の組織や体制作りが必要です。その中で人々が、安心して礼拝を捧げ、また霊的に成長することができます。

### 2A 感謝の歌のいけにえ 12

次は、城壁を感謝の歌をもって奉獻する喜ばしい話に移ります。かつてゼルバベルとヨシュア率いる帰還民が、神殿の再建の土台ができた時に、いけにえを捧げて喜びの声を挙げましたが、ここでは、城壁が完成したことを喜ぶ場面です。主への感謝をささげる賛美を、城壁の上を歩きながら捧げていく場面を見ます。

## 1B ゼルバベルとヨシュアからの系図 1-26

### 1C 祭司とレビ人 1-21

#### 1D ゼルバベル時代 1-11

<sup>1a</sup> シェアルティエルの子ゼルバベルおよびヨシュアと一緒に上って来た、祭司とレビ人は次のとおりである。

今はネヘミヤの時代です。今、ここで書いている総督ゼルバベルと大祭司ヨシュアと共に帰還したのは、紀元前 538 年頃であり、ネヘミヤが帰還したのは 445 年辺りでしたから、約 100 年前の話になります。そこからのつながり、系図をしっかりと立てていく作業をここで行っていきます。今の祭司またレビ人が、確かに帰還民における祭司とレビ人の家系の人間なのかどうかをはっきりさせるためです。

<sup>1b</sup> セラヤ、エレミヤ、エズラ、<sup>2</sup>アマルヤ、マルク、ハトシュ、<sup>3</sup>シェカンヤ、レフム、メレモテ、<sup>4</sup>イド、ギネトイ、アビヤ、<sup>5</sup>ミヤミン、マアデヤ、ビルガ、<sup>6</sup>シエマヤ、エホヤリブ、エダヤ、<sup>7</sup>サル、アモク、ヒルキヤ、エダヤ。以上はヨシュアの時代に、祭司とその同族のかしらであった者たちである。

ヨシュアの時代の祭司のそれぞれの氏族のかしらです。

<sup>8</sup> また、レビ人では、ヨシュア、ビヌイ、カデミエル、シェレベヤ、ユダ、マタンヤで、感謝の歌を受け持っていたのはマタンヤとその兄弟たちであった。<sup>9</sup> また、彼らの兄弟のバクブクヤとウンニは、務めのときには彼らの向かい側に立った。

レビ人が、感謝の歌を捧げていました。神殿の中に入る時に、彼らは入ってくる人々の両側で、感謝の歌を捧げていました。詩篇 100 篇に、「感謝しつつ主の門に、賛美しつつその大庭に入れ。(4 節)」とありますね。

<sup>10</sup> ヨシュアはエホヤキムを生み、エホヤキムはエルヤシブを生み、エルヤシブはエホヤダを生み、

<sup>11</sup> エホヤダはヨナタンを生み、ヨナタンはヤドアを生んだ。

ネヘミヤの時代は、大祭司がエルヤシブで、その息子たちがいました。

#### 2D エホヤキム時代 12-21

<sup>12a</sup> 次に、エホヤキムの時代に、祭司で一族のかしらであった者は次のとおりである。<sup>12b</sup> セラヤ族ではメラヤ、エレミヤ族ではハナンヤ、<sup>13</sup> エズラ族ではメシュラム、アマルヤ族ではヨハナン、<sup>14</sup> メリク族ではヨナタン、シェバンヤ族ではヨセフ、<sup>15</sup> ハリム族ではアデナ、メラヨテ族ではヘルカイ、<sup>16</sup> イド族ではゼカリヤ、ギネトン族ではメシュラム、<sup>17</sup> アビヤ族ではジクリ、ミンヤミン族、モアデヤ族で

はピルタイ、<sup>18</sup>ビルガ族ではシャムア、シエマヤ族ではヨナタン、<sup>19</sup>エホヤリブ族ではマテナイ、エダヤ族ではウジ、<sup>20</sup>サライ族ではカライ、アモク族ではエベル、<sup>21</sup>ヒルキヤ族ではハシャブ、エダヤ族ではネタンエル。

ヨシュアの息子、またエルヤシブの父であるエホヤキムの時代の、祭司のそれぞれの氏族のかしらたちです。

#### 2C ネヘミヤの時代の登録 22-26

<sup>22</sup> エルヤシブ、エホヤダ、ヨハナン、ヤドアの時代にレビ人は一族のかしらとして登録され、また、祭司はペルシア人ダレイオスの治世に登録された。<sup>23</sup> レビの子孫で一族のかしらたちは、エルヤシブの子ヨハナンの時代まで、年代記に記されていた。

このようにして、ネヘミヤの時代にいる祭司やレビ人の子孫が、公式に登録されました。ダレイオスの治世とは、ダレイオス二世のことだと思われ、423年から404年です。

<sup>24</sup> レビ人のかしらたちは、ハシャブヤ、シェレベヤ、およびカデミエルの子ヨシュアであり、その兄弟たちが彼らの向かい側に立って、組と組が相応じて、神の人ダビデの命令に基づき、賛美をして感謝をささげた。

先にあったように、賛美と感謝をささげる奉仕、向かい側に立って捧げます。そしてそれが、「神の人ダビデの命令」であるということです。その命令は、詳しく歴代誌第一 23章から書かれています。23章5節に、「四千人は門衛となり、四千人は私が賛美するために作った楽器を手にして、【主】を賛美する者となりなさい。」とあります。25章1節には、こうあります。「また、ダビデと軍の長たちは、アサフとヘマンとエドトンの子らを奉仕のために取り分け、豎琴と琴とシンバルに合わせて預言する者とした。仕事に就いた者の数は、その奉仕にしたがって次のとおりである。」

ダビデが、「神の人」と書かれていますね。「使徒 13:22 わたしは、エッサイの子ダビデを見出した。彼はわたしの心になつた者で、わたしが望むことをすべて成し遂げる。」神の心になつた人でありました。それは彼が完璧であったからではありません、むしろ神の心を一心に追い求めていた人という意味です。この人に倣いたいという思いをもって、今、ネヘミヤの時代、感謝と賛美の歌を回復させたいと願っているのです。

<sup>25</sup> マタンヤ、バクブクヤ、オバデヤ、メシュラム、タルモン、アクブは門衛で、門の倉を見張っていた。

<sup>26</sup> 以上はエホツァダクの子ヨシュアの子エホヤキムの時代と、総督ネヘミヤ、および学者である祭司エズラの時代の人々である。



こうやって、大祭司ヨシュアの時代と、その息子エホヤキムの時代、さらに、ネヘミヤとエズラの時代の人々が登録されています。そして、このことをもって奉献式を執り行います。

## 2B 城壁の奉献式 27-47

### 1C 歌い手の召集 27-30

<sup>27</sup> エルサレムの城壁の奉献式に際して、彼らはあらゆる場所からレビ人を捜し出してエルサレムに連れて来た。シンバルと琴と豎琴に合わせて感謝の歌を歌い、喜びをもって奉献式を行うためであった。<sup>28</sup> 歌い手たちは、エルサレムの周辺の低地やネトファ人の村々から、<sup>29</sup> またベテ・ギルガルやゲバとアズマウエテの農地から集まって来た。この歌い手たちは、エルサレムの周辺に自分たちの村々を建てていたのである。

レビ人がエルサレムの周囲の村々に住んでいるところが 11 章に書かれていましたが、そこから捜し出してきました。そして、ダビデの命じたように、シンバル、琴、豎琴に合わせた感謝の歌を歌わせ、喜びをもって奉献式を行います。再び出てきましたね、民が律法の解き明かしを聞いて悲しみましたが、けれども、主を喜ぶことがあなたがたの力だと励まされて、彼らは元気を取り戻しました。そして仮庵の祭りを祝って、大いに喜びました。イエス様は、弟子たちにこのことを望んでおられました。「ヨハ 15:11 わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、あなたがたが喜びで満ちあふれるようになるために、わたしはこれらのことをあなたがたに話しました。」

<sup>30</sup> 祭司とレビ人は自分たちの身をきよめ、また民と門と城壁をきよめた。

主に対して聖なるものとなるべく、きよめの儀式も行なっています。これは、単なる喜びではなく、主の救いにあずかることの喜び、主を喜ぶ聖なる喜びです。主との交わりによって喜びに満たされるために、罪の告白による清めを経験するように、使徒ヨハネは勧めました。「Ⅰヨハ 1:9 もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。」

## 2C 賛美隊の行進 31-39

### 1D 右の方に向かう組 31-37

<sup>31</sup> 私はユダの長たちを城壁に上らせ、感謝の歌をささげる二つの大きな賛美隊として配置した。一組は城壁の上を右の方に、糞の門に向かって進んだ。<sup>32</sup> 彼らのうしろに続いて進んだ者は、ホシヤヤとユダの長たちの半分、<sup>33</sup> アザルヤ、エズラ、メシュラム、<sup>34</sup> ユダ、ベニヤミン、シエマヤ、エレミヤであった。<sup>35</sup> 祭司のうちのある者もラツパを持って進んだ。まず、ヨナタンの子ゼカリヤ。ヨナタンはシエマヤの子、シエマヤはマタンヤの子、マタンヤはミカヤの子、ミカヤはザクルの子、ザクルはアサフの子である。<sup>36</sup> 次に、ゼカリヤの兄弟たちシエマヤ、アザルエル、ミラライ、ギラライ、マアイ、ネタンエル、ユダ、ハナニで、神の人ダビデの楽器を持って続いた。学者エズラが彼らの先頭

に立った。

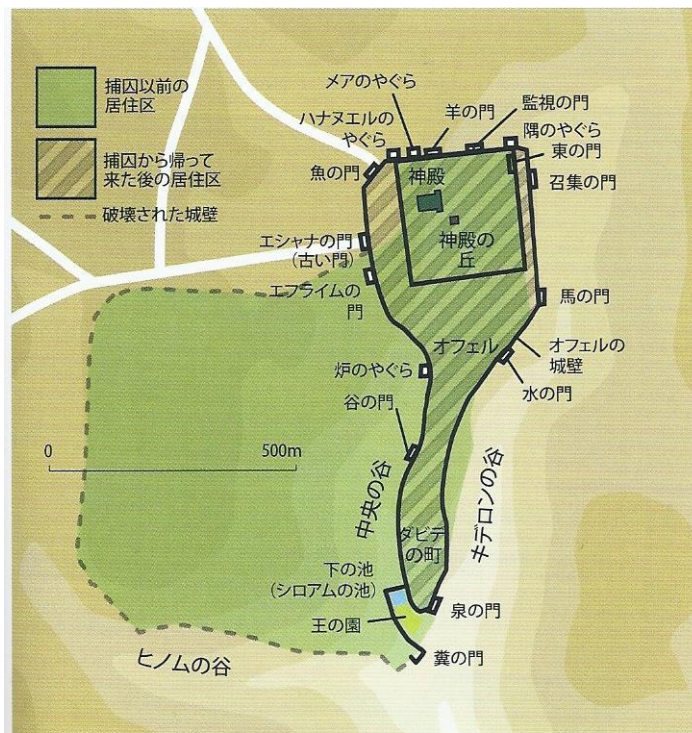
賛美隊が城壁の上に上ります。先のレビ人が先頭に行き、その後ここにいるユダの長たちが進みます。そして学者エズラを先頭にして、祭司たちがラッパを手にして進んでいます。非常に興味深いですが、これで思い出すのが、エリコの城壁の周りをまわった時の姿です。武装した者たちが先頭におり、七人の祭司が角笛を吹いています。そこに神の箱が後ろを進み、さらにその後ろに祭司が角笛を吹きます。この行例の行進をエリコの周りで行ったのです。これは、万軍の主がエリコを裁かれる御使いたちの姿を象徴しているのでしょう。

ここでも同じようにエルサレムが賛美に取り囲まれ、その中に主がそして天使たちが守っている姿を示しているのかもしれませんが。教会が携挙される時、主には御使いたちがいて、ラッパを吹き鳴らしている姿があります。「Iテサ 4:16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。」

37 彼らは泉の門のところで、城壁の上り口にあるダビデの町の階段をまっすぐに上り、ダビデの家の上を通って東の方の水の門に来た。

賛美隊を二組に分けて、それぞれが反対の方向で回って、そして神殿のところで合流しますが、おそらく、谷の門から城壁に上がったのでしょう。ネヘミヤがかつて、そこからたった一人で瓦礫になっていた城壁を巡回しました。ここでは、時計回りと反対の方向で糞の門まで行き、それからダビデの町のところは急斜面になっていたので階段上になっていましたが、そこを上っていき、水の門に来ています。

この間、ラッパをもって祭司たちはそれを吹き、楽器もってそれを奏でて、エズラが彼らの先頭に立っています。そして、東のほうの水の門まで来ました。



帰還後のエルサレムの拡大

門の名称は、ネヘミヤ3章によるが、推測によるものが多い。

「バイブルワールド」 ニック・ページ いのちのことば社

## 2D 左の方に向かう組 38-39

<sup>38</sup> 感謝の歌をささげるもう一組の賛美隊は、左の方に進んだ。私はそのうしろに従った。民の半分は城壁の上を進み、炉のやぐらの上を通過して、幅広の城壁のところに進み、<sup>39</sup> エフライムの門の上を通り、エシャナの門を過ぎ、魚の門と、ハナンエルのやぐらと、ハ・メアのやぐらを過ぎて、羊の門まで進んだ。そして監視の門で立ち止まった。

もう一つの賛美隊の組は、時計回りで進みます。こちらは民が共に進み、ネヘミヤは最後に従っていきました。おそらく同じく谷の門から進み、北に行き、神殿のすぐそばにある羊の門まで行きました。

## 3C 神の宮での賛美 40-43

<sup>40</sup> こうして、感謝の歌をささげる二つの賛美隊は神の宮で位置についた。私も、私とともにいた代表者たちの半分もそうした。<sup>41</sup> また祭司たち、エルヤキム、マアセヤ、ミンヤミン、ミカヤ、エルヨエナイ、ゼカリヤ、ハナンヤもラッパを持って、そこにいた。<sup>42</sup> また、マアセヤ、シェマヤ、エルアザル、ウジ、ヨハナン、マルキヤ、エラム、エゼルもいた。こうして、歌い手たちは歌い、イズラフヤが指揮をした。

水の門、羊の門から二組がそれぞれ降りて行って、それでこのように、ラッパの音と感謝の歌で神殿を取り囲みました。

<sup>43</sup> 彼らはその日、数多くのいけにえを献げて喜んだ。神が彼らを大いに喜ばせてくださったからである。女も子どもも喜んだので、エルサレムの喜びの声ははるか遠くまで聞こえた。

すばらしいです、ゼルバベルの時代と同じように、その喜びの大声ははるか遠くまで聞こえてきます。神の宮のところでラッパを吹き、そして歌うたいが歌い、そして数多くのいけにえを捧げました。彼らだけでなく、今ここには、女も子供も喜び歌ったとあります。全ての人に関わって、喜びにいっぱいにあふれて主を賛美しているのです！

なぜこんなにも喜び踊ったのでしょうか？主がこの城壁を建て直してくださったのだということを確認することができたからです。もちろん彼らはこの工事をする時に自分の手をたくさん動かしました。しかし、すべてのことが初めから終わりまで主が成し遂げてくださったのだということを確認することができました。これはとても大事ですね、主がなされたことを、誰の所有にすることはできないのです。私たちの教会の働きも、主が行ってくださっているものです！誰も、自分のものだと主張してはいけないし、主張することはできません。

そして、二組の賛美隊による行進の賛美は、この城壁そのものの上を歩くことによって確かに主

が自分たちを守ってくださることを、外にいる者たちにも、異邦人や敵どもにも示すことができました。ここに大きな喜びがあったことでしょう。なにしろ、敵トビヤは、「彼らが築き直している城壁など、狐が一匹上っただけで、その石垣を崩してしまうだろう(4:3)」と言ったのです！敵に対して、圧倒的な勝利を誇示することができました。教会がこのようにして、主の御心を行い、主が初めから終わりまで成し遂げてくださっていることを確認し、そして敵に対して勝ち誇る事ができる、その喜びを手にしたいものです。

#### 4C 祭司とレビ人の生活の支え 44-47

<sup>44</sup> その日、財宝や、奉納物、初物や十分の一を納める部屋を管理する人たちが任命され、祭司とレビ人のために律法で定められた分を、町々の農地からそこに集めた。これは、職務に就いている祭司とレビ人をユダの人々が喜んだからである。

盟約の中に、レビ人と祭司の生活を支えるために十分の一を納めることが含まれていますが、今、彼らがそのことを喜んで行っていることは、すばらしいことです。彼らの奉仕があつてこそ、自分たちの礼拝だったのです。礼拝がすばらしいと思っているから、それだけ自分たちは献げたいと願う、ということです。

<sup>45</sup> 彼らは、自分たちの神への任務ときよめの任務を果たした。歌い手や門衛たちも同様であつた。ダビデとその子ソロモンの命令のとおりである。<sup>46</sup> 昔から、ダビデとアサフの時代から、歌い手たちのかしらたちがいて、神への賛美と感謝の歌がささげられた。<sup>47</sup> ゼルバベルの時代とネヘミヤの時代、全イスラエルは、歌い手と門衛のために定められた分を日ごとに渡していた。彼らはまたレビ人の分を聖別し、レビ人はアロンの子らの分を聖別していた。

こうやって、10章の盟約によってモーセの律法が回復しただけでなく、12章のレビ人と祭司の登録によって、ダビデとソロモンに主が命じられていたこと、賛美と門衛の奉仕も回復しました。こうやって、みことばが回復し、また礼拝が回復しました。これが神の民であり、神の家である教会においても同じです。天で行われること、また神の国で行われることの前味として、初穂である御霊の働きとして、私たちも同じ召し与えられています。